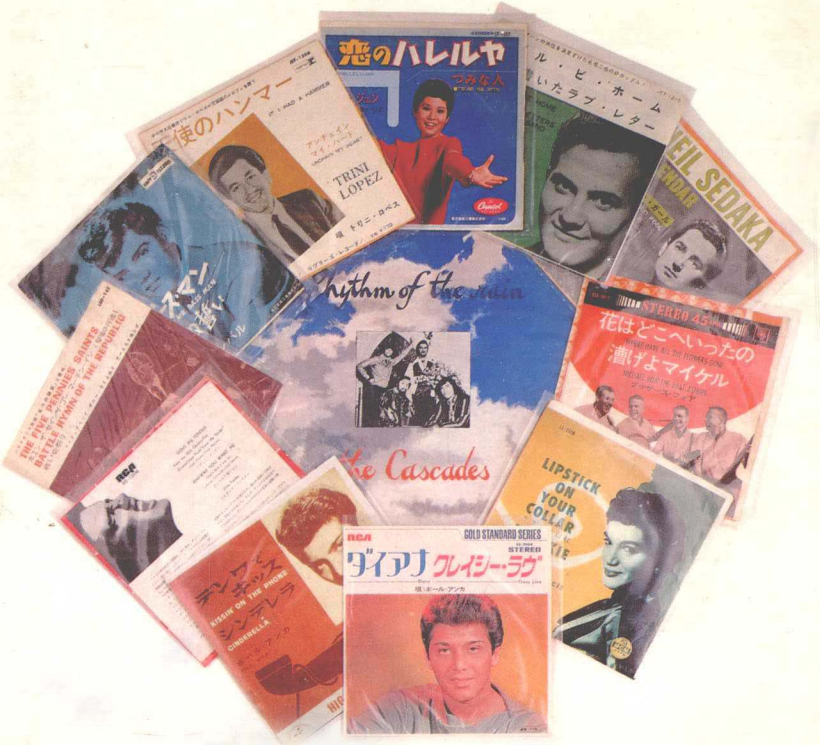
気分はリバイバル

——12のポップス・12の短篇——

村松友視



ノバイバル

村松友視

気分はリバイバル

昭和60年10月1日　第1刷

著　者　村松友視

発行者　西永達夫

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町 3—23

電話　東京03(265)1211(代)

定　価　1100円

印刷所　大日本印刷株式会社

製本所　大口製本印刷株式会社

©Tomomi Muramatsu 1985　Printed in Japan

目

次

「気分はリバイバル」

悲しき雨音 *RHYTHM OF THE RAIN* 7

恋のハレルヤ *HALLELUJAH* 33

砂に書いたラブ・レター *LOVE LETTERS IN THE SAND* 55

カレンダー・ガール *CALENDAR GIRL* 77

ミスター・ベース・マン *MR. BASS MAN* 99

五つの銅貨 *THE FIVE PENNIES* 121

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

花はどこへいったの　*WHERE HAVE ALL THE FLOWERS GONE*　143
カラーに口紅　*LIPSTICK ON YOUR COLLAR*　165
天使のハンマー　*IF I HAD A HAMMER*　187
デンワでキッス　*KISSIN' ON THE PHONE*　207
ラヴ・ミ・テンダー　*LOVE ME TENDER*　229
ダイアナ　*DIANA*　251
あとがき　274

連作短篇集

気分はリバイバル

日本音楽著作権協会（出）許諾
第八五六五〇五四―五〇一号

悲しき雨音

RHYTHM OF THE RAIN

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「あら……」

宇多川の方から声をかける前に、町子はそう言って近づいてきた。日曜日のスーパー・マーケットは、中途半端な時間のためか、客の数が極端に少なかった。町子は、手に持った黄色いカゴの中へ、何種類ものチーズを放り込んでいた。

「しばらくね……」

町子は、宇多川の姿を上から下へと舐め回すように見た。それは、宇多川の現在の境遇をしっかりと見定めるといったふうな目だったが、しばらくすると何やら納得したようにうなずいて目を外した。

「この、近くなの？」

「ええ、すぐそこ」

「買物かい」
「決ってるでしょ」
「あ、そうか。ここはスーパーだもんな」
「ま、スーパーへ万引しにくる女だっているんでしょうけど」
「ちょっと、時間ある……」
「ええ」
「お茶でも飲まないか」
「そうね……」
「買物は、ぜんぶすんだの？」
「あ、ちょっと待って……」
町子は、さっきチーズを取ったところまでもどり、チーズ・フォンデューの銘柄を選んでいたが、紙の箱入りのをひとつ取って、黄色いカゴの中へ入れた。毛皮のコートを着てスーパー・マーケットのカゴを持った町子は、三十を出たばかりのはずなのに、かなり老け込んだ感じがした。
（俺がスカウトしたころは、こんなふうじゃなかった……）
宇多川は、まだスカウト・マンをやっていたころ、銀座を歩いていた町子に声をかけたのだった。背はふつうだが、首から肩へかけての線と、脚のかたちが実に見事だった。そして、何より

もその笑顔が輝いていた。

（まったく、町子が笑うとパッと華やかなムードがながれたもんな……）

宇多川は、ホステスのころの町子の、さまざまなシーンを目のうらによみがえらせた。それは、ついきのうのことのように宇多川の中であざやかな輪郭をつくる記憶だった。だが、レジで金を払っている町子からは、そのあざやかなシーンを掻き消してしまうけはいがあり、宇多川は眉を寄せて咳ばらいをした。

「チーズ・フォンデューなんて、しゃれた物を買い込んだんだな……」

スーパー・マーケットの近くの喫茶店で町子と向い合った宇多川は、空いた椅子の上に置かれた紙袋をながめながら言った。

「これ、微妙に味がちがうのよね、メーカーによって」

「へえ、そんなもんかねえ」

「ブランデーが入ってるか入ってないかで、感じがちがったりするのよ」

「そういうもんなの……」

「宇多川さん、これ好きじゃないの」

「一度食ったことあるけど、何だか頼りなくてねえ」

「そうかもね、チーズだけなんだから」

「あっちの方は引っ越したの」
「あっちの方って……」
「ほら、広尾のプール付のマンション」
「ああ、あれね」
「引っ越したのかい」
「もう、とっくよ」
「いま、何やってるの」
「有閑マダム」
「……」
「ちょっとね、オジイチャンのお世話になって、悠々自適の生活しちゃってるのよ」
「へえ、悠々自適ねえ」
「宇多川さんは、あいかわらず銀座のお仕事……」
「いや、俺も銀座は引退して、六本木のちょっとしたレストランをやってるんだ」
「それ、出世？　それとも左遷？」
「左遷ってのはいいな。ま、横ばいってとこだね」
「あ、そう」

そんな話をしながら、宇多川はさっきから毛皮のコートを脱ごうとしない町子を奇妙に思っていた。初春とは言え、店内にはまだ暖房が入っている。その中で毛皮を着ている町子の、額のあたりに汗が滲んでいた。それを手の甲でときどき拭っているところを見ると、町子はハンカチの用意もしていないらしい。

耳にピアスをしているのだが、その耳自体の手入れを怠っているらしく、何となく汚れっぽいように見えた。指は細くしなやかだったが、爪のマニキュアが剝げかけて、刷毛ではいたような感じに紅がかすれている。肝心の首から肩にかけての線や、脚のかたちの見事さは、丈のながい毛皮のコートに隠れて、宇多川の目にさらされることはなかった。

「有閑マダムって、いいもんかねえ」

「そりゃ、暇は暇だから、楽なんだけどね」

「楽だけど、つまらない、か」

「そうね」

「町子、どうして銀座から出て行ったんだ」

「……」

「男かい」

「それもあるけど……」

「じゃ、借金取りか」
「そんなことはなかったわね」
「どうしてなんだ、銀座を退いたのは」
「何となく、いやになったって言うかな」
「へえ……」
宇多川は適当に相槌を打っていたが、どこかで町子に会ったら言ってやろうと思っていたことがあった。町子を最初にスカウトしたのは宇多川だったし、二度ばかり店を替わるときにも宇多川が立会って、円満に条件をとりまとめた。だが、三軒目の店から町子は忽然といなくなってしまったのだった。それはたぶん、町子が独断で条件のいい店へ引き抜かれたのだろうが、自分に対して何の相談もなしにそうしたことを、宇多川は愉快には思っていなかった。
また、自分が口をきいた女が引き抜かれたということは、スカウト・マンとしての宇多川にとっても、致命的な痛手に近かった。運転免許に×印が増えていくように、引き抜きはスカウト・マンとしての商売の成り立ちに関わることだった。町子のケースで自信を失った宇多川は、それからは無難そうな女ばかりをスカウトし、何という事件は生じなかったものの、仕事に対する熱が徐々に失せていったのだった。俺が銀座から足を洗った遠因は、たしかに町子が引き抜かれたことにあるはずだ……宇多川はそう思っていた。その町子が、銀座から出て行った理由を、「何

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com